

花を見るたにても、夏か、こいしました

「おい、やめたほうがいいんじゃない。友人が止めるのも振り払い、わたしは手こぎボートの上からザンと飛び込んだ。晩夏の猪苗代湖は波もなく穏やかだった。元気な中学生には湖が優しく見えたのかも知れない。二杯ほど潜ったところで耳がキーンと鳴り出した。だが、サンゴのように白く見え湖底はもう少しだ。頑張り、と言いつつ聞かせて手足を動かす。息が苦しい。その直後、「ウツ」と声が出そうになった。そこから急に水が冷たくなったのだ。全身が一瞬でこわばった。

わたしは急いで浮上しようとする場面で体を転回させ上を向いた。その瞬間、足の裏になま温かいヌルツとした感触があったのと同じに、白いホコリのようなものが舞い上がった。あつという間に周りは白く濁り、視界が遮られた。早く水上にもどらなければ…。たった三杯の深さだったが、上にゆらゆらと見える水面が遠いかなたに思えた。わ

民 報 サロン

たしは何とか水上に出てボートにはい上がった。ボートで待っていた友人は「だから言ったべ」とあきれ顔。あれから三十年がたった。

こんなこともあった。何年前前に湖水の水質調査を手伝った時のことだ。長浜からモーターボートに調査機器を積み込み、湖の中心部である湖心に向

まれるようにスッと消え入る様子が見えた。わたしは一瞬「底にたどり着くまでどのくらいの時間がかかるのだろうか」と思った。誰かが「潜って取ってくるにはちょっと深いな。でも金のおと銀のおのがあるかもよ」など冗談を言っている。そこは湖の最

深部で深さ九四呎。あらためて紺べき

きっと何か潜んでる



大竹 力

かった。この日も静かな湖面にジリジリと夏の終わりの日差しが照りつけていた。その船上でわたしは、調査機器

の湖をのぞき込んだ。わたしは、何かがちらの動きをじっと見ているような気がしてならなかった。

猪苗代湖はまだ神秘のベールに包まれている。しかし、各研究機関の調査という音と「やっちゃった」という声

により、湖底の一部にはフロックといわれる茶褐色の微細粒子が堆積(たいせき)していることが分かってきた。

湖の水質についての関心も高くなっていくが、わたしは、調査項目の一つの水温が特に気になる。湖岸の浅瀬では感じられないが、水深三〇呎以下の水温は真夏でも一けた台である。この重く冷たい水は湖底近くの岩盤から噴き出しているものかもしれない。磐梯山の伏流水の可能性もある。

子どもたちに猪苗代湖の話をするところがある。決まって「怪物とかいますか?」などという質問が出る。わたしは「何かは分からないけど、いるよ」と答えたりしている。意外な回答に子どもたちは互いの顔を見合わせる。わたしはそれを見て「みんながそのことを研究する博士になってくれたらうれしいな」と声を掛ける。

さて、わたしが三十年前に触れたものは何だったのだろうか。今となっては知る由もないが、将来の博士たちに謎の解明を期待しよう。(猪苗代町字新町、ふくしま認定ツーリズムガイド)

ん
て、しましたか 現地は 叩きました

も、た花も弁天様もやる 着いた、カヤ